2022.2.2
┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏

PEKA (ペダゴジーを考える会)
News Letter no.192

┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏┏

■□■ 次回例会のご案内 □■□■□■□■□■□■□■□■□■□■
日時： ２月１９日（土）14:30〜17:30
Zoom で行います。

◎事前申込をされた方だけに招待をお送りします。
参加ご希望の方は、お手数ですが 2 月 17 日（木）までに以下のリンク先からお申し込み下さい。
https://forms.gle/ByCsPmXsq7qB1qAP8

◎例会前日に、ご指定のメールアドレスに招待 URL をお送りします。

◆２月のテーマは.... 語彙を増やすには / 教案を作る
（年間テーマ：教科書をどう使うか）

■■■例会報告//////////////////////
//////////////////////////////////【2021/12/18＠Zoom】

１2 月のテーマ ＜発音にどこまでこだわるか＞ 司会 近藤野里さん

最初に司会の近藤さんから、フランス語の音の la norme（規範）としての母音表(PDF)がシェアされ、記載されている 16 母音の音を全部教えるべきなのか、学習者にとっての発音とは綴り字と音の対応を理解することなのか、フランス語の音はいくつだと考え、どこまで細かく教えればいいのか、などご自身が悩んでいる点についての共有があった。
次に近藤さんは参加者をグループに分け、１）初学者に対していつ発音について教えているか、２）授業で実際にどの音を教えているか、学習者が苦手な音とその教え方、３）発音を意識するアクティヴィテにはどんなものがあるか、を話し合うように指示した。以下、グループで話し合われた内容について記載していく。

◆グループ活動１：初学者に対していつ発音について教えているか。
- （複数の参加者から）初学者に発音を教える時、最初にフランス語の綴り字と音の対応規則一覧表を見せて教えることはしない。単音を細かく発音できるより、フランス人に通じるにはどうしたらよいかという観点から教える。
- 発音を教えるタイミングは、文を教えている時や会話を教えている時に学習者が間違え

たら繰り返させる。聞いている生徒も自分の発音を意識する。
- できるだけ初期に、癖がつかないうちに教える。
- 正しく発音できたときにほめるようにする。

グループ活動 1 では、「授業で実際にどの音を教えているか」というグループ活動 2 で話われるテーマについても既に意見が出た。

- 最初のうちは、en を「エン」と読まない、in を「イン」と読まない、in は[ɛ̃]と読む、でよいのではないか。
- （複数の参加者から）狭い[e]と広い[ɛ]の違いなどの細部にこだわらない。
- accent aigu と accent grave の違いなどは綴りでは教えるが、発音のレベルでは教えない。
- 直しすぎると発音するのが嫌になってしまうのでトラウマにならないように気を付ける。
- ネイティブに通じるフランス語になればよいのではないかという観点から教えるが、学習者本人が J'aime を正しく発音しているつもりでも、「ジァイム」と発音している場合は、将来フランスに行ったときに通じなくて困る可能性があるので問題ではないか。
- deux heures と douze heures は発音の違いを教えるのは難しいので、言いながら指で数を示すなどジェスチャーを使って聞き手に理解させるなど、発音を補うテクニックも教える。
- cours と coeur の違い。最初にアシスタントのフランス人に発音してもらう。

次に学習者に教科書を持たせて、教師が cours と発音した時は教科書を表に、coeur の時は裏にさせる。最後にそれをペアでもやらせる。相手が聞いてわかるように、違いを意識して発音するようになる。

グループ活動 1 の終了後、近藤さんは、一つ一つの音にこだわるよりもフレーズという塊で発音しながら教えることに重点を置く参加者が多いことを認識したそうだ。これに対してある参加者からは、一つ一つの音を教えないということではなく、初学者には教えないが、後から少しずつ教えていく、という意見も出た。

その後近藤さんから、よくフランス語の教科書の最初に 16 個の母音と綴り字の対照表が掲載されているが、近藤さんご自身は、16 個の母音のうち後ろよりの[ɑ] や鼻母音の[œ̃]は教えなくなってきている、また、/e/と/ɛ/、/ø/と/œ/、/o/と/ɔ/
の音に関しては、
/e/, /ɛ/ > /E/
/ø/, /œ/ > /Œ/
/o/, /ɔ/ > /O/
として教えているという報告があった。

ある参加者によれば、発音から母音を減らす、ということは FLE の世界では以前から言われていることで、Hachette 社から出版されているフランス語学習者向けの教科書では 2003 年ごろから、単純未来の-rai [e]と条件法の -rais [ɛ]では API が異なるが、両者の区別をしないで教えてもよいと記載されているそうだ。しかし近藤さんによれば実際のところ、日本の多くの教科書では、そこまで母音を減らして教えているものは少ないということだった。

次に近藤さんから、教科書 (« Les 500 EXERCICES DE PHONETIQUE A1/A2 » Hachette 社)分析に関する報告があった。
この教科書では、単純未来の partirai や j'irai は、狭い[e]で発音すると言われていたのに、広い[ɛ]の音で発音するという分類をしてしまっている。また、j'ai, je vais は、狭い方の[e]で発音するのが規範だと書いてあるが、実際には[e]で発音しても[ɛ]で発音しても、どちらでもいいような書き方をしている。
こういう点は、[e]と[ɛ]の発音の区別が厳密ではなくなってきているフランス語話者の最近の傾向を反映しているようだ。
だから、近藤さん自身も[e]と[ɛ] を区別しないで、教えるようにしているそうだ。

また近藤さんご自身が教えている音の一つとしては、[ʒ]の音があるそうだ。Bonjour の[ʒ]は舌先を硬口蓋に向けて立て、呼気をその間からもらし、唇を突き出して発音するので日本語の「ジュ」の音とは異なっている。[ʒ]に関しては複数の参加者から、注意して教える音の一つだという言及があった。

この後近藤さんは、参加者が実際に授業で教えている音は何かというテーマで再びグループ活動 2 を行った。

◆グループ活動 2：授業で実際にどの音を教えているか、学習者が苦手な音とその教え方について。
- 初学者であれば、一番最初に日本人にとって難しい[y] [u] [œ]の音を教える。例えば tu の[y]の音や dessus /dsy/と dessous /d(ə-)su/の違い。
- 通じるフランス語にするには、（単音より）むしろ prosodie が大事なのではないか。例えばイタリア人、スペイン人が仏語を話すときはほぼ彼らの発音で一つ一つの単音の発音をしているが、イントネーションはフランス語っぽくしている。話すとき、フランス語の最後の母音を長めで強めにする方が通じやすいので、そこは教えるようにする。
- enchaînement の間違いについては教える必要がある。Il habite は本来 Il の語末の子音/l/と habite の語頭の無音の/h/を連読して読むところを、Il と habite を離して読んでしまう。
- 本来は最後の子音が残るはずだが、最後の子音[z]が落ちる(douze, treize, quatorze)。最後の子音がきちんと発音できていないから deux との区別がつかない。
- フランス語の prosodies を教えるのにカルロス・ゴーンが日本語をしゃべっているビデオを見せる。「今年も↑よろしく↑お願いします↑」と、phrase の最後が上がるフランス語のイントネーションのまま日本語を話しているのを聴いてもらい、フランス語と日本語の prosodie の違いの理解を促す。
- [o]と[ɔ] ：日本人の「お」の発音は唇に力が入らないので、口が開く感じになる。そうすると、文の最後に[o]が来ても、自然に力が入らなくなってしまう。[o]と[ɔ] を区別せずどちらかを教えるならば、（日本にはない唇の筋肉を使う）狭い方の[o]を教えておいたほうがいいのではないか。

議論は徐々に深まり、どの音を教えるかという問題から、学習者がフランス語の語彙を片仮名書きで覚えようとしてしまう弊害についても論じられた。

◇片仮名書きの弊害
- [y][u][œ]を初学者に教える音だと考えている参加者が少なくなかったが、sur, sous, soeur は片仮名書きをすると同じ音になってしまい、結果的にフランス語で読めなくなってしまう。
- [b]と[v]もその意味では同じで ba と va も片仮名だと同じ音になってしまう。
　Vincent や Il va の “va”や “valise”の”va”がみな[ba]になってしまう。
- [R]と[l]の問題も同じ。

◇片仮名書きの解決方法

40 代～60 代の学習者を教えていたある参加者からは、授業中に語彙や文を読んで聞かせた時に、教師側は片仮名で発音を記載していないのに学習者は片仮名で書いてしまう、覚えられない、音がわからないと言われてしまうので、そういう場合どうしたらいいのか、という発言があった。

これを受けて別の参加者からは、教師側は学生が音の区別ができると考えているのではないか、学習者は音の違いはわかるかもしれないが、それをどう再現したらいいのかわからないから、この報告例のように、自分がわかる音を片仮名に置き換えるしかないのではないか。教師側としては、学習者は再び間違うかもしれないが、間違っていると自分で気づいて自分で直していく手助けを教室でしていくしかない、という発言があった。

◇その他の解決方法として。

- スマホで教師の発音を録音して、自宅で聴いてもらう。
- 片仮名を付けなければいけない仕事をしたことがある。[y]と[u]と[œ]の違いは、[u]を発音した時は「ウ」に丸をつけるなど、してもいいのではないか。発音記号がわからないのであれば、翌週全部[y]と[u]と[œ]が「ウ」になってしまうのを避けるためには、[u]の時には「ウ」を〇で囲むとか、[y]の時は「ウ」の前に小さなィをつけるなど工夫したらいいのではないか。

◇片仮名化を取り払うためのアクティヴィテ
- 文化に興味を持ち、フランスに旅行に行くために現地で使えるフランス語を知りたいという学習者が多い。このため現地で役立てるために、
- Je voudrais visiter (場所).
上記の文の (場所)の部分に片仮名化しやすく間違えやすい固有名詞、例えば　Chartres / Lourdes, / Lens /Reims などを入れて言ってもらう。片仮名で覚えてしまうとフランスに行ったときに使えなくなってしまうので、それを取り払うための練習として行っている。

◇コンクールの問題

議論の中では、発音コンクールにおける序列化の問題も取り上げられた。
ある参加者から、 accent japonais は個性ともなるので、コミュニケーションに支障をきたさない限り別に否定することではない、しかし、スピーチコンテストでは正確な発音、norme

の発音が要求されそこで賞が出るので、結果としてネイティブ幻想みたいなものが高校生に植え付けられてしまうのではないかという懸念がある、という意見が出た。

これに対して、コンクールでは、個性はあっていいけれども、聞いている側がわかる発音ができるようにする指導はしなければいけない、基礎は大事ではないか、という意見や、発音の美しさを問う、コンクールなどでは規範に近い発音の美しさを追及する必要があるのではないか、という意見が出た。

この後、再び近藤さんから、発音のアクティヴィテを一つ提案するならどんなものがいいか、再びグループで話し合うよう指示があった。

◆グループ活動３：発音のアクティヴィテを一つ提案するなら、どんなものがいいか。

- 詩とか歌を使う。訳は既に出しておいて音で遊ぶ。できればリズムが強調されるもの。身体を使う。
- 86 年に流行っていたラップ、kazero というフランス人の二人組のグループの歌（Thaï nana）を聞かせてフランス語のリズムをつかませる。
- 発音のアクティヴィテを最優先順位にはしない。（授業の中で発音を間違えたら）個人的にそこで発音を直してもらう。教えるとしたら Laurent と Roland を舌の位置を手を付けてジェスチャーとして示しながら発音してみせる。そのほか、[R]の発音。
- 「シ」と[si]の違い。
- フランス語と英語ではイントネーションが違うので、それをダダダという音で表して違いを理解させる。
- リズムと音節を理解してもらうために、例えば qua/tre と qua/torze/を教師が音節で手を叩きながら発音して聞かせる。
- 発音のアクティヴィテでは、prosodie と son と両方を考える必要がある。一方で教師は単独の母音や子音に集中してしまう傾向があるので、prosodie に注意する必要がある。Michel Billier はその二つの要素以外にジェスチャーやコミュニケーションをする時の態度、社会的な行動の仕方もまとめて発音として注意して教えていく必要があると言及しているが、その意見に賛成である。

例会の終わりに近藤さんから、発音を教えるときに綴り字に気を取られていたことを意識したという感想が述べられ、発音の学習の重要性を教師に意識してもらうにはどうしたらいいか、という問いかけがあった。
同じ意見は他の参加者からも出され、日本で出版される多くのフランス語教科書にあるつづりと音の対応一覧表を、学習のはじめに見るだけのような発音の教え方の問題を意識してもらうにはどうしたらいいかという議論になった。
これに対して、ある参加者からは、違う言語でこの綴りは、こう発音するので明日までに覚えて来るように指示を出されたら、全く馴染みがない発音を一度の授業で記憶に留め再現することの困難さを実感できるかもしれない、という提案があった。
実際、近藤さん自身はエスペラント語の学習で、また別の参加者はヒンディー語やブルトン語の学習中にそうした困難さを実感したという。

フランス語の「音」を教えるために、参加者の間にこれだけ多面的な議論が戦わされたのを目の当たりにして、いかに報告者自身が「音」を教えるということやフランス語の音に関して無知だったかということを痛感させられた。非常に勉強させていただいたという想いである。
(L.M.）